

## 如月に

如月を『新明解国語辞典』で引くと、「衣更着、すなわち寒さがきびしく、重ね着をする意という、陰暦二月の雅語」とある。『広辞苑』で引くと、「生更ぎの意。草木の再生することをいう。着物をさらに重ね着る意とするのは誤り。陰暦二月の異称」とある。「草木の再生することをいう」は、旧暦では春に属す二月の説明として適っているし、言葉の響きも綺麗だ。とは言え、「重ね着る意とするのは誤り」というのは、「皆さんはそういうにお使いですが、それは間違っていますよ」と言われているようで心地よくない。このところの寒さ、そして『新明解国語辞典』を好むものとして、控えめに言って「衣更着」もまた「適」としてほしいところである。

私たち教員にとって、2、3月は特に忙しい。出会いと別れの準備の期間。生徒の皆さんにとっても、卒業、入学ほどではないにせよ心改まる時。進行中の学年末試験に精一杯挑んでほしい。

2月の最初の休日、千葉県にある、いすみ鉄道に乗ってきた。外房の大原（いすみ市）と、内陸の上総中野（夷隅郡大多喜町）を結ぶ20kmにも満たない小さな鉄道だ。もとは国鉄の木原線という。内房の木更津と大原を結ぶ構想からこの名が付けられたものの、全通することなく、大原、上総中野間を結ぶ路線名となった。地元の足としていすみ鉄道として残りはしたものの、国鉄・JRが手放したかったローカル線ゆえ、その経営は厳しいものにならざるを得ない。そのような中、公募で社長に就任された鳥塚亮さんは、列車と沿線にムーミンのキャラクターを取り入れたり、旧国鉄の車両を導入して休日に観光急行を運行したりして、観光客や鉄道趣味人を引き寄せる工夫に努めておられる。

総武線、外房線で大原に向かった。改札口を出ると、右側にいすみ鉄道の切符売り場だ。もちろん券売機はあるのだが、目当ての観光急行に乗るには、行き先を告げて急行券を買うのがやはり良い。2両の旧式ディーゼル車のうち1両は指定席だ。勿論指定席に乗る。私たちの間で硬券と呼ぶ、昔ながらの切符が用意されており、そこに手書きで席の番号が記される。ディーゼル特有の排気音の上昇と、その割にはスピードの上まらない重苦しいスタートが懐かしい。急行とは言っても実にゆっくりと走る。急ぐ旅でもないことから、気にもかからない。この日は社長の鳥塚さんが同乗されており、指定席の客に地元のパンと焼き菓子、それにジュースが配られた。思いがけないプレゼントに心が満たされる。菜の花にはまだ季節が早いものの、ところどころに黄色の若い花が咲いている。大原から30分、鉄道写真家の中井精也さんがこよなく愛する第二五之町踏切を通過する。今日も何人かのカメラマンが思い思いのアングルで構えている。いつも撮っていたときには列車の中から手を振る人の姿を見ていたのだが、今日はこちらが手を振る人だ。踏切通過から10分で大多喜に着いた。急行列車はこのさき終点の上総中野に向かうのだが、ここで私は下車した。大多喜は徳川家康に仕えた本多忠勝が入城した城下町で、古い家並みの残る静かな町である。いくつかある小江戸の一つではあるが、観光客の喧噪はない。それゆえ訪れる者にとっては心地よい情緒が感じられるのであるが、地元の人にとっては、それだけでは済まされないのだろうと思ったりもする。大多喜城という銘の地酒があり、軒下に杉玉が吊られていた。少し小高い処に大多喜城があり、城下からも見ることができる。天守は再建のものではあるが、背景の山の木立に溶け込んでいた。

大多喜からは観光急行ではなく普通の列車に乗った。新型車両の走りは力強く、全駅に停車しても朝乗った急行より早い。部活帰りと思われる大多喜高校の生徒と同じ席であった。怪しまれるのを避けて話しかけなかったのだが、今にして思えば、大変に残念である。

大多喜の町では、特に何かを観るという目的もなく、ただ歩くことを心地よく感じていることに気づいた。列車の中では、仕事のことがまったく頭を過ぎらないことに気づいた。無論いつもいつも仕事のことを考えている訳ではないのだが、この解放感は久しく経験することのなかったことだ。

良い休息を得て、おかげで今日も笑顔でいることができている。